

年頭にあたって  
平和をつくりだす人々とともに

坂口和子 (東京 Y W C A 代表理事)

本年は敗戦から、ひろしま、ながさきの被爆から 80 年を迎える。私の手元に戦争体験、被爆体験を綴り、語ったご本人や関係者からいただいた冊子がある。いずれも 15、6 年前に出されたもので、気が付けば、くださった方々はここ数年の間に天に召されている。体験を証言するのはこれが最後になるとの思い、つらすぎて本当は語りたくないという気持ちを押しての強い覚悟が伝わってくる証言集を前に、戦争体験、被爆体験を当事者から直接聞くことが困難になってきているとあらためて実感していた。

そんな折、日本原水爆被害者団体協議会 (日本被団協) が 2024 年のノーベル平和賞を受賞したとの報に接した。被爆の過酷な体験を語ってくれた何人かのお顔が浮かび、日本被団協の働きとすべての被爆者をねぎらう授賞は、大変うれしく、心からお祝いをと思うと同時に、核兵器禁止条約を批准しないばかりか締約国会議にオブザーバー参加さえしない日本政府の姿勢に、情けなく怒りの思いが沸き上がる。

受賞理由は、肉体的苦しみやつらい記憶を、平和への希望や取り組みを育む選択をした被爆者に敬意を表し、約 80 年間戦争で核兵器が使われていないという事実は、日本被団協と被爆者の努力が核のタブー (歯止め) の確立に貢献した、としている。私が注目したのは「いつか歴史の目撃者としての被爆者はわれわれの前からいなくなる。しかし、記憶を守る強い文化と継続的な関与により、日本の新たな世代は被爆者の経験とメッセージを引き継いでいる。」の箇所である。

「核」否定の思想に立って活動する Y W C A の会員として、多くの体験者からたくさんの証言を聴き、語り合うことができた世代として、証言をしっかりと受け止めて次の世代へバトンをと志してきたものとして、東京 Y W C A が、平和と正義委員会、武蔵野平和チームを中心に、ノーベル平和賞委員会も注目した日本の若い活動家と積極的に連携し、取り組んだプロブムに何回か参加し、多くの気づきを与えられたことは何よ

りもうれしく、勇気づけられている。

11月に日本被団協の事務局次長濱住治郎さんを招いた講演・対談会で、直接お祝いを述べることができたのは幸いなことであった。短期間でこの会を実現できたのは、核兵器廃絶をめざす若い人たちが立ち上げたNGOとの連携によるもので、柔軟な発想と行動力を実感した時でもあった。

目的と想いを同じくする者が、地域を超え、組織を超え、年齢を超えて連携することを実現したこの一年余の東京YWCAの取り組みは、日本のYWCAの「『核』否定の思想に立つ」運動を担う一員として、活動を深化させる節目の年になったのではないかと感じている。

日本YWCAが1971年から取り組んでいる「ひろしまを考える旅」の働きを私たちが支えることも忘れてはならない。運動の具体的な取り組みとして「ともかく広島へ」と会員が学びの機会として始められた旅が、数年後には平和教育の一環として「中高生ひろしまを考える旅」となり、そして現在の「ひろしまを考える旅」へと旅は続けられている。この旅の特徴は、大人から中高生まで、留学生や近隣諸国のYWCAからなど多様な参加者が旅をともにし、そして近年は運営に18～30歳の若いボランティアがかかわっていることである。

東京YWCAが実施している子どもたちや女性の健康や福祉などの様々な事業や活動が、すべて「核」のない、戦争のない平和な世界を礎石としていることを覚えてほしい。事業に活動に携わるすべての者がともに心をつなげて、礎石の良き守り人であり続けたいと願っている。